

| | |
|--------------------|--|
| Title | フランスの「郊外暴動」を伝えるメディア言説： 「語り」に見られる 2005 年秋の「暴動」 |
| Author | 中條, 健志 |
| Citation | 人文研究. 61 巻, p.184-195. |
| Issue Date | 2010-03 |
| ISSN | 0491-3329 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | Publisher |
| Publisher | 大阪市立大学大学院文学研究科 |
| Description | 栄原永遠男教授：中村圭爾教授退任記念 |

Placed on: Osaka City University Repository

フランスの「郊外暴動」を伝えるメディア言説 — 「語り」に見られる2005年秋の「暴動」 —

中 條 健 志

「郊外暴動」は、1980年代からフランスの主要な社会問題となっている。フランス「郊外」の都市化は、高度経済成長期の主要都市郊外における住宅団地の建設に伴う、農村部や国外からの移住者の増加による人口密集化によって進んだ。そこでは当初、移民労働者の劣悪な住宅、労働環境が問題とされ、また彼（女）らに対するレイシズムも起こった。そして、1980年代に入ると「郊外」に住む「若者」たちが差別に対して異議申し立てを行うようになり、そうした動きに反応した当局側との衝突から「暴動」が生まれる。この頃からメディアが「暴動」をセンセーショナルに報道するようになり、「暴動」は一方で異議申し立て行為として、他方で暴力行為として、時々状況に応じて様々な形で表象される。しかし、そこで用いられる「郊外」や「若者」というタームには実体がなく、その内実が明らかにされないまま、「郊外」と「若者」は「暴動」と結び付けられていた。ここでは、2005年秋に発生した「暴動」を伝えるメディア言説を事例に、「郊外」と「若者」がどのように「問題」とされたかを検証している。言説分析の結果、2つのタームが自明のものでないという点、それにもかかわらずそれらがネガティブな文脈で用いられていることが分かった。

1. はじめに

フランスでは、1970年代後半に都市郊外における「暴動」が社会問題化し、それは今日に至るまでフランス社会で議論を呼び続けている。ここでの「郊外」とは、第二次大戦後の高度経済成長期（1945 - 1974年）に、労働力の強化に伴う農村部から都市部への人口移動、及び国外からの移民受け入れ対策として行われた、大規模な集合住宅建設によって発展した主要都市の周辺地域を指す。

フランスにおいて「郊外」を意味する「バンリュー」(banlieue) というタームは、一般的な語義をこえて、「危険な地区」を示唆することがある。その背景には「郊外」で発生する「暴動」があり、そこが治安の不安定な場であるという認識がある。

しかし、「暴動」が「郊外」やそこに住む人々に「固有」の問題であるかについては議論の余地がある。例えば、「暴動」の原因として指摘される差別や貧困は、特定の地域だけが抱える問題ではない—確かに、国平均よりも高い失業率が郊外の諸地域で記録されているが、割合の高さと「暴動」の発生件数が比例するという訳ではない—。さらに、「郊外」と呼ぶことのできる全ての地域で「暴動」が発生している訳ではなく—パリやリヨンといった大都市の周辺

地域で起こるものもあれば、ル・アーヴルやトゥールーズ、ニーム、アヴィニョンといった地方都市（内部）で起こるものもある。「郊外」と呼ばれる空間は実際のところ明らかではない。

それにもかかわらず、「暴動」が発生すると「郊外」がその舞台として、そしてそこに住む「若者」たちがその当事者として報道される。ここでは、空間としての「郊外」及び集団としての「若者」があたかも自明の存在として捉えられ、それを前提として「暴動」に関するあらゆる事象が検証されている。しかし、「郊外」が空間的に固定化できないということは、その住民としての「若者」という集団もまた流動的なものでしかなく、従って「郊外」や「若者」を実体視することは実際には不可能である。

2005年10月27日、パリ北郊のクリシー＝ヌー＝ボワ市において、警察の尋問から逃走していた3人の若者が、隠れこんだ変電所内で感電し、内2人が死亡するという事件が起こった。やがて、彼らの死に反応した若者が異議申し立てを表明するために放火や投石行為を行い、間もなくそれはフランス全土に拡大する。「暴動」(émeute) または「都市暴力」(violence urbaine) と呼ばれたこの事件はおおよそ1ヶ月間にわたって続き、沈静化した後も新聞、雑誌、TV報道のみならず、ジャーナリストや研究者、活動家、政治家たちによる多くの議論を巻き起こした。しかしながら、そこでも「暴動」を『「郊外」あるいは「若者」の問題』として捉える議論が一般的であった。

本論ではこの「2005年秋」を伝える新聞報道をもとに、クリティカル・ディスコース・アナリシス（批判的言説分析）という立場からヴァン＝ダイク（1988, 1991, 2006）が行った「言説による『問題』の再生産」に関する研究を方法論的枠組みとし、『ル・モンド』で取り上げられる人々の「語り」の中で、「郊外暴動」における「郊外」あるいは「若者」がどのように「問題」とされたのかを明らかにする。

2. 「暴動」とは何か

「郊外」の形成と「暴動」にはどのような繋がりがあるのだろうか。郊外の住宅団地がメディアで「問題」として初めて取り上げられた時期は、1960年前後である。これは、経済成長が好調に展開し、またフランスの支配下にあった地域の脱植民地化（に伴う旧宗主国への移民現象）が進んだ時期とほぼ同じである。

例えば、パリ北郊のサルセル市では、1954年には8,397人だった人口が、1962年には35,800人まで増加している。メディアでは「サルセルリット」(sarcellite) という言葉が用いられ、それは市内の住宅団地で発生する諸問題全般を意味していた。この時期の新聞報道をみると、郊外の住宅団地が若者たちにとって危険な場所であり、そこでは非行が増加しているという指摘がなされている。

但し、BASTIÉ (1964)、CHOMBART DE LAUWE (1965)、DAGNAUD (1978) らが述べるように、こうした郊外における非行の増加は、都市化の帰結として捉えられており、非行

行為が即ち「暴動」と見なされることはなかった。

1970年代に入ると、景気後退を背景に、移民労働者を中心としたストライキが度々起こり、郊外に住む人々の労働環境が問題となる。1974年には政府による移民受入れの停止が決定され、経済成長も終わりを迎える。1977年には、出身国への完全な帰国を条件に、1人あたり1万フランの支援金を支給するという政策も行われた。

このような流れの中で、メディアでは外国人労働者に対するレイシズムが争点となる。ここでは、犠牲者である彼（女）らとレイシストであるフランス人との対立という構図がクローズアップされた。1978年1月21日の放送のテレビ番組 *Les Dossiers de l'écran* の視聴者アンケートでは、65%の人々がマグレブ系及びアフリカ系移民に対して深い敵意を感じると答えた。

「暴動」が社会問題として認知され始めるのはこの時期である。1977年、法務省に設置された「暴力と犯罪に関する検討委員会」は、「郊外暴動」について議論を行っている。そこでの議論を総括すると、暴力行為は急速な都市化や人々の住居形態—集合団地、高層ビルであるということ—、格差、未成年者の「非社会化」(désocialisation)、また「故郷の喪失」(déracinement)と深く結びついているというものだった。またそこでは、非行を働く「若者」の年齢は18歳から30歳であると定義されている。

この中で興味深いのは、「暴動」が移民労働者やその家族の社会的統合と関係しているという指摘である。「脱伝統文化」(déculturnation)、「家族の離散」(éclatement)、言語及び教育レベルの「壁」(barrage)、生活及び労働環境での「隔離や孤立」(ségrégation, isolement)、「不安定さ」(instabilité)といった用語が委員会の議論の中で用いられている。

無論、「郊外」には移民労働者以外の住民もあり、この委員会の報告をそのまま理解することは十分ではない。またそこでは、フランスで生を受けた移民の子ども世代を「移民」として捉えるのか、あるいは「フランス人」として捉えるのか、といった議論を欠くことができない。後述するが、一部の報道において、今日もなお「郊外暴動」が「移民問題」として伝えられる要因はこうした点にあると考えられる。一方で、この時期に「暴動」が広く認知されるようになった事はほぼ間違いないと言える。

3. 「暴動」の歴史

次に、「2005年秋」に至るまでの、「郊外暴動」の経過を辿っておきたい。1981年夏、ヴェニスュー市マンゲット地区を中心とした、リヨン市東郊の複数の地域で若者と警官隊との衝突が次々に発生する。彼（女）らは中心街から車を盗み、自分たちの地区でそれに火を放った。これはセンセーショナルな事件としてメディアで広く伝えられる。CHAMPAGNE (1991)、JAZOULI (1992)、BATTEGAY & BOUBAKER (1992, 1993)らは、この事件を契機に、「郊外暴動」がメディアの中で社会問題化されたと指摘している

筆者が過去の『ル・モンド』の記事を調査した結果では、一つの問題体系、あるいは問題提

起として「バンリュー」というタームが使われたのは、80年代前半の「暴動」報道からであった。また、MILLS-AFFIS (2007) は、テレビが「燃える車」や「壁の落書き」を画面に映し出したのはこの時期からであると述べている。

次の表は、81年以降メディアで報道された代表的な「暴動」である。

| |
|-----------------------------------|
| 1981年7月：マンゲット地区他（リヨン市郊外） |
| 1983年3月：マンゲット地区 |
| 1990年10月：ヴォー＝アン＝ヴラン市（リヨン市郊外） |
| 1991年3月：サルトルヴィル市（パリ市郊外） |
| 1991年5月：マント＝ラ＝ジョリ市（パリ市郊外） |
| 1993年11月：ムラン市（パリ市郊外） |
| 1994年3月：ガルジュ＝レ＝ゴネス市（パリ市郊外） |
| 1995年5月：ル・アーヴル市（仏北部、セーヌ＝マリティーム県） |
| 1997年12月：ダマリー＝レ＝リス市（パリ市郊外） |
| 1998年12月：トゥールーズ市（仏南部、オート＝ガロンヌ県） |
| 1999年2月：ヴェニスユー市（リヨン市郊外） |
| 1999年5月：ヴォーヴェール市（仏南部、ガール県） |
| 2000年7月：モンベリアール市（仏東部、ドゥー県） |
| 2002年10月：ストラスブール市（仏東部、バ＝ラン県） |
| 2003年3月：ニーム市（仏南部、ガール県） |
| 2003年12月：アヴィニョン市郊外（仏南部、ヴォークリューズ県） |
| 2005年6月：クルヌーヴ市（パリ市郊外） |
| 2005年10月：クリシー＝スー＝ボワ市（パリ市郊外）他 |

これらはいくまで「暴動」の一部であり、メディアで大きく取り上げられなかったもの、報道されなかったものは含まれていない。ここで留意しなければならないのは、メディアが扱う「暴動」が必ずしも事件の規模と一致している訳ではないという点である。放火や破壊行為の被害の大きさ、犠牲者の数の多さによって事件が注目されるという側面は勿論あるが、鶴巻(2006)が指摘するように、「暴動」が頻発した地域に、沈静化後も引き続きメディアが注目を向けることによって現地の人々に緊張を与え、「暴動」を再発させているという部分がある。また、SEDEL (2009) は、取材を行う報道陣らが、カメラの前で若者たちに破壊行為を煽った事例を報告している。「2005年秋」では、「暴動」が全国各地に拡大した後も、報道される地域の多くがパリ近郊であった。

従って、メディアが取り上げる「暴動」を全て同質なものとして捉えることはできず、メディアによる「暴動」の「語り」には偏差があることを指摘しておく必要がある。但し、少なくともそれらを「郊外暴動」という枠組みの中で理解することは可能であろう。規模の大小を除けば、自動車への放火、投石行為、若者と警官隊との衝突といった点をそれぞれが共有している。

では、「暴動」の背景には何があったのだろうか。歴史の変遷を追いながら概観したい。

まず、1980年代前半には、「郊外」の「移民の若者」の存在が取り上げられ、住宅政策から見放された劣悪な生活環境から「暴動」に走る彼（女）らが犠牲者として描かれた。また、郊外での反アラブ・レイシズム問題も指摘される。但し、この「移民の若者」という表現は問題性を持っている。ドフェール内務大臣がこの時期に、「第2世代の若い移民たちはフランス人である」という声明を発表するが、それは「移民の若者」という言葉が、フランスに出生した「(移民の)子ども世代」を「フランス人」と区別し排除する、という態度と結びつく場合があるからであった。

これ以降80年代後半までは、若者たちによるフランス社会への異議申し立てが注目を集める。中でも有名なのは、自らを「ブール」—「アラブ」の逆さ言葉に由来し、主にマグレブ諸国に出自を持つ移民たちの子ども世代が、自らのアイデンティティを表明するために用いた言葉で、差別的な意味合いはない—と呼んだ若者たちの運動で、彼（女）らは盛んにメディアに登場し、非合法状況下にある人々への滞在許可証の発行を政府に呼びかけ、また郊外におけるレイシズムや不十分な都市政策を公に訴えた。こうした背景には、「暴動」だけでなく、あからさまなレイシズム的発言を主張する極右政党の台頭があった。

1990年代に入ると、「暴動」は著しく増加する。これは、「ブール」たちの行動が落ち着いた後のことだった。BATTEGAY & BOUBAKER (1993) は、その要因として、一方には政府が急速に悪化していく社会状況を変革するという希望を失ったこと、他方にはジャーナリズムが「郊外」に対してあまり活動的でなくなったことを挙げている。SEDEL (2009) は当時のメディアの語り方に変化を読み取っている。それ以前との最大の違いは、事件の反レイシズム的な側面よりも地元警察官の若者に対する横暴な振る舞いが問題とされ、そこに「郊外暴動」の原因を見ているという点であった。また、この時期に「ギャング」(gang)、「敵対する(若者)グループ」(bandes rivales)、「暴徒」(horde)、「乱暴者」(terreur) といった言葉が、若者を形容するためにメディアで使われ始めた。

しかしSEDELまた、こうしたメディア上での変化を、「郊外」の内実の変化と同一視することはできないとしている。そして、メディアが非行を働く集団と、社会への異議申し立てをする集団とを混同していることを指摘する。つまり、明らかなレイシズムや警察の暴力行為に対する抵抗と、一般的な「暴力」とを区別する必要性がそこで提起されている。こうした指摘は「2005年秋」においても為され、例えばMAUGER (2006) は、メディアが「暴動」(émeute) といった言葉で問題を素早く「解釈」することで、その暴力的な側面だけが伝わってしまうと

警告している。

このようにして、初めは社会的排除の犠牲者であった「若者」たちが、やがて暴力行為の主体として取り上げられるようになる。さらに、1990年代後半以降には、「暴動」が「イスラム原理主義」や「テロリズム」としばしば同一視され、イスラム嫌い (islamophobia) という文脈の中で「郊外暴動」が語られることもあった。特に「9.11」以降はその傾向が強いという (GEISSER, 2003)。

4. CDAという立場から

分析に先立ち、クリティカル・ディスコース・アナリシス (以下、CDA) という立場について説明を加えておきたい。一般的にCDAは、言説に内包された権力関係を批判的に分析するという視点に立つ、談話分析研究の1つの立場である。そこでは、言説のイデオロギー性とそれによる「問題」の(再)生産に焦点が当てられ、言語形式から引き出される表面的な意味だけにとらわれず、言説のコンテキストとそこに埋め込まれた潜在的な意味を社会認知的なレベルで読み取ることが目標とされている。

CDAにはいくつかのアプローチがあるが、中でも筆者はヴァン＝デイクが展開した社会認知的研究 (Social-Cognitive Studies) を参照している。それは、社会と社会認知、言説との関係を、社会的不平等の維持という観点から捉えたものである。例えば、メディア言説を通して「差別」を正当化する言葉が発信された場合、受信する側の人間がそれに日常的に接することによって両者の立場—ヴァン＝デイクの言葉を借りれば、支配と被支配の関係性—が曖昧になり、「差別」が当然視される共通認識ができあがる、といった構造がそれである。本論の文脈に即して言えば、「郊外」や「若者」を「問題」と見なすような認知的な操作が、メディア言説を通じて人々の「郊外は危ない」といった認識を作り上げる過程ということになる。

従って、CDAは言説の相互作用性とコンテキストの役割を重視する、言説分析の機能的なアプローチである。それは、提示された言説に「内在」するものを分析するという意味での言説分析とは異なり、言説を社会的実践として捉え、それがどのように社会文化的に「表れて」いるのかに注目している。

5. 分析資料

以上の点を踏まえ、「2005年秋」をめぐるメディアの「語り」を分析する。ここでは、『ル・モンド』を参照メディアとする。筆者は、批判的言説分析の立場から、イデオロギーが強くぶつかる場ではなく、むしろ調和のとれた談話からイデオロギー性を引き出す (野呂、1996、2009) ために、比較的「リベラル」と呼ばれる所謂「左派系」メディアを取り上げている。筆者の調査 (中條、2009) によれば、「2005年秋」を報道した『ル・モンド』には「若者」や「郊外」を問題視する言説はほぼ見られず、そこではむしろそうした姿勢の政策・政治家が非難さ

れ、「暴動」を経験した人々による「異議申し立て」が記事の中心を占めていた。これと相反する論調であった保守系ジャーナリズムを資料とすることも可能ではあるが、「暴動」にある程度「理解」を示す立場からの発言も比較的多く取り上げられている同紙を選んだ。

また、対象とする記事は、「暴動」を最初に伝えた10月29日付から、10日後の11月8日付までのものに限定した。それは、次の2点の理由からである。1点目は、HAUT & HOPE (2007)が行った暴力行為の発生件数を量的に把握した調査に基づいている。そこでは、11月7日を境に「暴動」の件数は低下している。2点目は、内務省が発表した、自動車放火台数と警察による不審尋問の件数の推移に基づいている。そこでも、放火台数、尋問件数ともに7日をピークに減少している。従って、「ピーク」となった7日の翌日の記事までを取り上げることにした。

6. 「語り」

分析資料から抽出した言説を以下に挙げる。括弧内に記載されているのは発言者の身分・役職、氏名、掲載日（合併号は2日にわたる日付）である。これらの情報で欠けているものがある場合は、記事中にも記載が無かったことを意味する。また、氏名が明らかにされていないものは「匿名」とした。尚、太字は筆者による。

初めに提示するのは、「郊外」について言及されている発言である。

郊外では警察官の数が減っている。

（ヴァル＝ドワーズ県議会議員（匿名）、11月1日）

警察は、こうしたデリケートな地区に適応できない唯一の公共サービスだ。

（「都市治安のためのフランスフォーラム」（議員団）調査官ミシェル・マルキユス、11月5日）

予防策と抑止、鎮圧が同時にできる、地区にとっての真の警察が配備されることを我々は望んでいる。

（警察組合連合副事務局長ジャン＝クロード・ドゥラジュ、11月5日）

郊外に軍隊の派遣を要求する。

（保守右派政党「フランス運動」党首フィリップ・ド・ヴィリエ、11月6-7日）

ここでは、「郊外」や「地区」（quartier）という言葉によって、「暴動」の発生した空間が指定されている。そこにはまた「警察」や「軍隊」という言葉が並び、「郊外」と治安対策が関連付けられて語られている。しかし、「郊外」と名指された空間が特定されることはない。また「デリケートな地区」（quartier sensible）という表現は、「問題」の多い地域を呼ぶためにメディアでしばしば用いられるものだが一公的なタームではない一、これも「郊外」同様に実体がなく、「暴動」やその他「治安」に関わる問題と併せて発せられることで、ネガティブなイメージを表象している。

次のような発言もある。

こうした地区では、市長たちはムスリム・コミュニティの代表者なしにはなにもできません。

(セヌヌ＝サン＝ドニ県の総合情報局の幹部(匿名)、11月1日)

ここでは、「暴動」が起こった「地区」とムスリム・コミュニティとの関係が指摘されているが、「代表者なしには」という部分についてはその理由が説明されていない。仮にこの指摘が正しいとしても、それは「地区」のムスリム・コミュニティの役割の重要性を伝える以上の意味は持たないはずである。しかし、「こうした地区」と「代表者」とのつながりを認めるこの発言は、「暴動」を起こす人々と「ムスリム」とがあたかも同一であるかのような印象を与える可能性を持っている。

一方で、「郊外」を別の角度から語る以下のような発言も見られた。

周辺化、排除、失業が事件の本当の原因としてあります。

(パリ市内のモスク司祭ラルビ・ケシャ、11月6-7日)

ここで起こったことは、どこにでもあることです。地区の特徴はただ、他所よりも高い失業率です。

(クリシー市の高校教員ルイズ・ミシェル、10月29日)

1人目のケシャは、「郊外」の置かれている状況を「周辺化」(marginalisation)と言いつけている。それは、「郊外」が「中央」(＝都心部)からみて「疎外」された、あるいは「逸脱」した空間であることを意味している。また、「排除」や「失業」についての指摘があることから、ここでは先に挙げたような「治安」ではなく、「社会(福祉)」的な視点から問題が観察されているといえる。

2人目のミシェルは、「地区」の問題を「どこにでもあること」と述べ、それを特別視していない。むしろ、「他所」よりも高い失業率を「特徴」として指摘し、「暴動」それ自体は問題にしない。これは「暴動」が全国的に拡大する直前の段階での発言であり、当時はクリシー市がその舞台としてフランス中から注目を集めていた。そうした事を踏まえると、「暴動」という形で事態が問題化する(＝語られる)ことへの懸念をミシェルの発言からは読み取ることができる。

以上に挙げた言説を整理すると、「郊外」は様々な形で語られてはいるものの、それが空間として明示されていないという点、及びネガティブな文脈で用いられているという点では共通していることが分かった。そして、空間については明確な記述が見られない一方で、「問題」

についての言及は常に具体的である。例えば、「警察」、「ムスリム」、「失業」といったタームがそれである。

次に、「若者」に関連する言説を提示する。

あちこちから若者たちがクリシーにやって来て、反体制的な嫌がらせを行った〔後略〕。
明らかにクリシー＝スー＝ボワの人間ではない者が、蛮行を犯すための口実を見つけた。

(クリシー市長クロード・ディラン、10月29日)

犯罪者や不良たちが我々の治安対策をほとんど好んでいないとしても、明らかにフランス人はそれを支持している。〔中略〕野蛮で破壊的な行為を前にして一私は不良たちと〔中略〕郊外の圧倒的多数の若者たちとを一切混同しない、フランス人は政府の全面的な決断を頼りにすることができる。

(ニコラ・サルコジ内務大臣、11月6-7日)

ディランの発言は、「暴動」が発生した直後に出されたものである。そこで彼は、「若者」たちが「外部」から市内に侵入し「暴動」を起こした、という立場をとっている。しかし、事件の発端は市内の若者の死亡事故であり、それに対する反応が「暴動」という形となって現れた訳であるから、「若者」たちの全てが市外出身者であると断言することは、少なくともこの時点では難しかったはずである。ディランの指摘に従えば、クリシー市の「人間ではない者」が「嫌がらせ」や「蛮行」を働いたことになる。

だが一方で、乱暴に見える彼の発言にもある種の整合性を読み取ることができる。つまり、「暴動」を起こす「若者」は市内にはいないという主張と、その「若者」の行いを非難することがそこでは両立している。社会党所属のディランは「郊外」問題に対して比較的リベラルな政策を持っており、右派議員のように「治安対策」を強く主張することはなく、「郊外」での失業や差別への取り組みを重視している。従って、彼のこの発言を要約すれば、「暴動」がクリシー市固有の問題ではないということになる。しかし、非難されている「若者」が何者であるのかは明らかにされていない。

サルコジの発言は、「暴動」に対する自らの「治安対策」を正当化するものである。彼は「若者」という言葉を「暴動」を起こす側ではなく、それ以外の「圧倒的多数」の人間に当てはめている。これは、「若者」と「蛮行」を並置させたディランとは正反対の印象を人々に与える。即ち、「郊外」の「若者」たちに罪は無く、そうではない（しかし、そこに住む）「野蛮」な「不良」たちが問題であるという主張である。そして、「フランス人」たちの「支持」を理由に、彼（女）らへの「決断」が述べられている。これは、ヴァン＝デイクの言う「人種差別否認のストラテジー」―「私はレイシストではない、しかし彼らは…」といった言い回しに内包されたレイシズム―と構造を同じくしている。

また、「郊外」の「不良」に「フランス人」が対置されているという点にも注目することができる。仮に「若者」も「不良」も全て「フランス人」であるとすれば、こうした指摘は意味を為さないはずである。つまり、「フランス人」ではない人間の存在が想定されていなければ、サルコジのこの発言は成立し得ない。無論、彼が実際に「フランス人」についてどういった認識を持っていたのかは不明だが、ここで「暴動」やその参加者の中に「非フランス人」(的なる者)の存在を示唆していることだけは明らかである。但し、この「フランス人」が持つ意味を発言から理解することはできない。

「フランス人」という表現については次のような発言もある。

私たちは他の人たちのようなフランス人ではないのです。

(クリシー市民 (40代、匿名)、11月2日)

これは、地域の差別や貧困の問題に対するあるクリシー市民の反応である。この「他の人たちのようなフランス人」ではないという状態は、サルコジの言う「非フランス人」と同型のものであるように見える。ある部分ではそうだが、サルコジがそれを「排除」の対象として否定的に価値付けている点で、両者には相容れない部分大きい。積極的に「非フランス人」の存在を指示するサルコジの立場は、市民とはほぼ対極に位置すると言える。一方で、「非フランス人」がネガティブなコンテキストの中で語られるという現象は両者に通底している。

これらの言説を整理すると、実体としての「若者」は明らかではないが、常にネガティブな文脈で語られているということが分かる。また、「フランス人」というタームがそこに併置されることで、彼(女)らを「非フランス人」(的なる)存在と見なす言説も見られた。但し、「郊外」がそうであったように、「問題」点の指摘に関しては「若者」をめぐる言説の中にも具体的なものが多い。例えば、以下のような発言がある。

警察の逮捕の仕方はしばしば強権的で、若者たちは侮辱されたと感じています。

(クリシー市内にあるモスクのイマーム、ダウ・メスキ、10月29日)

不幸なことだが私たちには選択の余地がない。グループでは[中略]皆が失業中だ。

(ナディール (ある若者グループの1人)、11月8日)

ここでは、「若者」が何者であるかといった議論はさほど重要ではない。それ以上に、「侮辱」を感じるような警察による「強権的」な取締りや、「選択の余地」のない「失業」が現実の問題として述べられている。こうした社会的排除についての指摘は、「郊外」に関する言説の中でも見られた。

7. まとめ

本論では、フランスの「郊外暴動」が語られる際にキーワードとなる「郊外」と「若者」が、それぞれどのように「問題」とされてきたのかを検証してきた。結果として、両者に共通する2つの事柄を確認することができた。1つは、「郊外」という空間も、「若者」のいう集団も実体がないという点、次にそれらが「暴動」に関係する場所／人々として、ネガティブな文脈で語られているという点である。

実体がないにもかかわらず、「郊外」や「若者」がある／いるかのように伝えられることは、メディア言説として伝えられる「暴動」が、「郊外」あるいは「若者」自体の「問題」と認識される可能性を孕んでいる。特に、「郊外」を「治安対策」の必要な空間として捉え、また「若者」を「フランス人」ではない「異質」な存在と見なすことで、それらの「他者性」が強調されることになる。

歴史的背景を鑑みると、「暴動」は時々の情勢によってその「問題」点を変化させてきており、「若者」も、それが用いられる状況に応じて様々な意味を持っていた。従って、「郊外」や「若者」というタームは形式的なレッテルに過ぎず、それらから「暴動」の原因を探ることは不可能だということになる。

「暴動」という現象を理解するためには、「郊外」や「若者」といった「レッテル」の中でそれを議論しない必要がある。また、そうした実体のないものを問題視する言説ではなく、社会的排除を指摘するような、現場からの具体的な発言を読み取らなければならないだろう。

【参考文献】

- ヴァン・ダイク、テウン（2006）「談話に見られる人種差別の否認」「共生」の内実 批判的社会言語学からの問いかけ 植田晃次・山下仁編、三元社。
- 中條健志（2009）『「若者」はどのように語られたか—2005年秋の「暴動」をめぐって』 *Revue japonaise de didactique du français, Vol.4, Études francophones*, SJDJF.
- 鶴巻泉子（2006）「メディアと「都市暴力」 ストラスブールの車放火事件から見た都市暴動という「公共問題」の構成」『フランス暴動—階級社会の行方』現代思想vol.34-3、青土社。
- 野呂香代子（1996）「円滑な関係をめぐる言語活動の会話分析」『追手門経営論集』Vol.2, No.2、追手門学院大学経営学部。
- 野呂香代子（2009）「クリティカル・ディスコース・アナリシス」『「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み』野呂香代子・山下仁編、三元社。
- BASTIÉ, Jean (1964) *La Croissance de la banlieue parisienne*, PUF.
- BATTEGAY, Alain et BOUBAKER, Ahmed (1992) « Des Minguettes à Vaux-en-Velin. Fractures sociales et discours publics », in *Les temps modernes*.
- BATTEGAY, Alain et BOUBAKER, Ahmed (1993) *Les Images publiques de l'immigration*, CLEMI/Harmattan.
- CHAMPAGNE, Patrick (1991) « La Construction médiatique des malaises sociaux », in *Actes de la recherche en sciences sociales*, décembre 1991, n.90.
- CHOMBART DE LAUWE, Paul-Henry (1965) *Des hommes et des villes*, Payot.
- DAGNAUD, Monique (1978) *Le Mythe de la qualité de la vie et la politique urbaine en France*, Mouton.

- GEISSER, Vincent (2003) *La Nouvelle islamophobie*, La Découverte.
- HAUT, François & HOPE, Henri (2007) Les Violences urbaines de novembre 2005: une affaire de bandes?, *La violence des mineurs*, Cahiers de la sécurité, n.1, INHES.
- JAZOULI, Adil (1992) *Les Années banlieues*, Seuil.
- MAUGER, Gérard (2006) *L'Émeute de novembre 2005. Une révolte protopolitique*, Croquant.
- MILLS-AFFIF, Édouard (2007) « Vu à la télé. La Saga des immigrés », in Rigoni, *Qui a peur de la télévision en couleurs? La Diversité culturelle dans les médias*, Montreuil.
- SEDEL, Julie (2009) *Les Médias et la banlieue*, Bdl éditions.
- VAN DIJK, T.A. (1988) *News as Discourse*, Erlbaum.
- VAN DIJK, T.A. (1991) *Racism and the Press*, Routledge.
- Le Monde*, 2005/10/29-2005/11/08.

【2009年9月10日受付、10月29日受理】

Discourse of Media on “Riot” in France: The Case of Autumn 2005

CHUJO Takeshi

Riots (émeutes) in the suburbs (banlieues) of France have been a major social problem since the 1980s. A period of high economic growth (1945—1974) led to a rapid urbanization in French suburbs and the construction of rent-controlled apartment complexes to house the increasing population of immigrants from rural areas and neighbouring countries. From the beginning, the economic groupings of this workforce became an issue which with time led to situations of discrimination and racism. In the 1980s the “youth” living in these “banlieue” apartment complexes revolted against what they saw as discrimination, and the conflict between them and the authorities, particularly the police, led to riots. At that time, reports of the riots in the French media were sensationalised. The riots were seen from different sides of the same situation: riots as acts of protest, on the one hand, and riots as acts of violence, on the other hand. However, the words “banlieue” and youth are not substantiated; that is to say, they are not clearly defined as a place and a group, although both terms are used in the media as entities. Furthermore both are linked to “riots”. By analyzing the discourse of the media reporting on the riots in the autumn of 2005, the usage of “banlieue” (suburb) and youth was verified and the results clarified two points. First, the meaning of these words changes with time and depending on the situation therefore they are not tangible entities. Second, in spite of this, these words continue to be used in predominantly negative contexts.